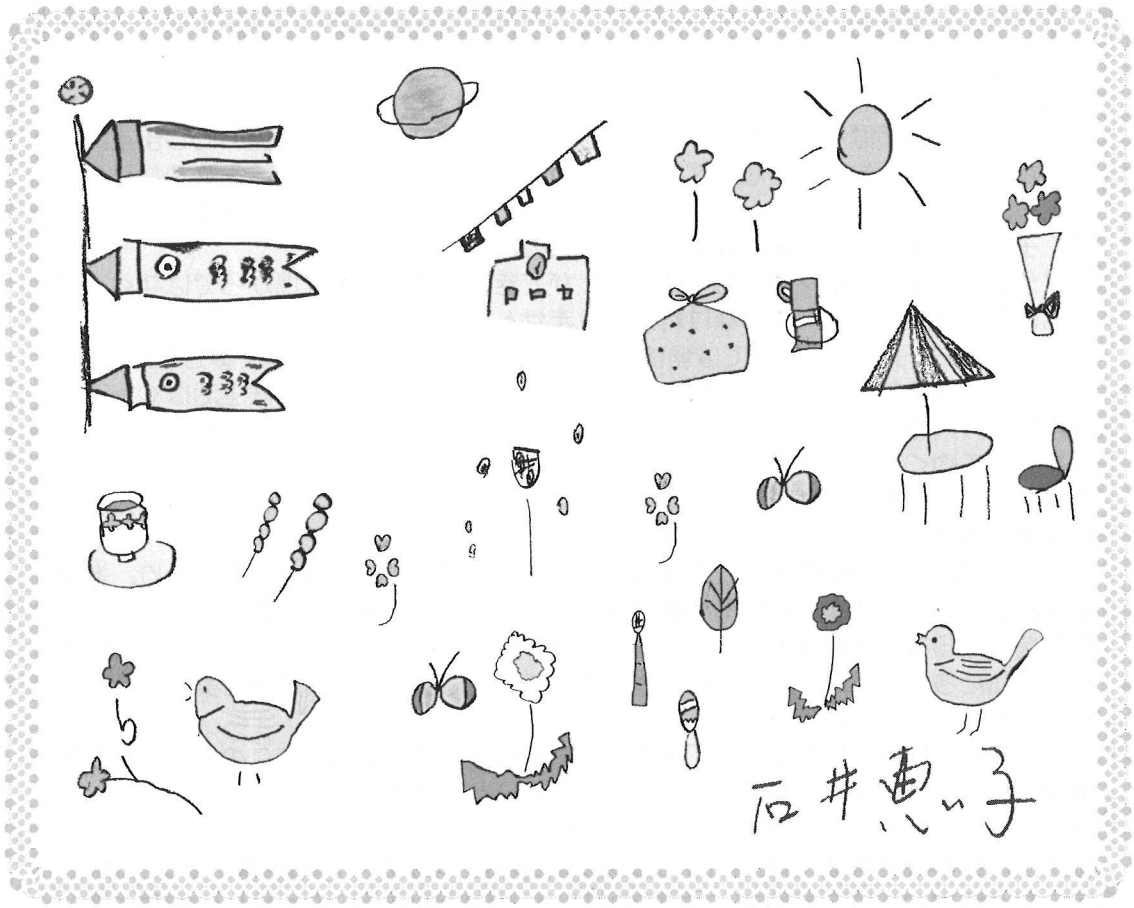
昭和４８年１月１３日第三種郵便認可
ＨＳＫ通巻５１８号
発行日／２０１５年５月１０日（毎月１０日発行）
編集人／白老町手をつなぐ育成会　佐 藤 春 光
北海道白老郡白老町字萩野 310-110
ＴＥＬ（0144）８３－３５３７
会　報／**２２４**
発行人／北海道障害者団体定期刊行物協会（ＨＳＫ）
定　価／１部１００円（会費に含む）

HSK

2015. 5月号

ほほえみ



白老町手をつなぐ育成会

北海道手をつなぐ育成会の60年

北海道手をつなぐ育成会が結成されてから６０年がたちました。６０年という月日は、様々な積み重ねをするには充分な月日ですが、初心を忘れさせてくれるのにも充分な月日です。

６０年前、育成会の先達は何を思いどんな気持ちで育成会を立ち上げたのか、今月も会報第１号を紐解き、会員の皆さんに６０年前の情熱を伝えたいと思うのです。

今年は戦後７０年という節目の年になります。戦後まもなく出発した北海道精神薄弱児育成会から学び取る英知は、障がい者支援に限定されない多くの英知があります。歴史に残る英知がいっぱいなのです。

それは、ともすると惰性に陥り保守的になってゆく私たちの生活や育成会活動に活を入れてくれる『思い』でもあり、再度奮い立たせてくれるカンフル剤でもあります。

育成会を創った先達のみずみずしくほとばしる感性を捕まえて下さい。

思いやりと助けあい

初代会長　城戸幡太郎

私たちの生活は思いやりと助けあいによって正しい秩序と美しい協和を保ってゆくことができるのだと思います。家庭の生活でも同じで、子どもを自分の所有物のように考えると、子どもは親の欲望を満足さす手段に使われます。子どもが親の希望通りにならないと、親は子どもを叱りつけたり、子どもをやっかいもの扱いにします。

親が子どもの学業成績を心配するのはよいのですが、それが世間体を恥ずかしく思ったり、期待はずれに失望したりすることになるのは、親の教育に対する虚栄であって、子どもの幸福を願う親の愛情からくるものとはいえません。

どうすれば子どもを幸福にしてやることができるかは、親の立場からではなく、子どもの身になって考えてやらなければなりません。親には興味もなく、ばからしいと思うことでも、子どもにとっては愉快で、それなら一生懸命にやれる仕事もあります。ばからしい仕事だと思ってもそれをやるものがなければ私たちの共同生活はやってゆけません。共同とか協力とかいうことは、自分だけではできないことを他人の助けをかりやってゆくことです。人々にはそれぞれ特殊な能力があります。それを働かせて助け合ってゆく生活が共同の生活であり、これによって私たちはそれぞれの天分を楽しみ幸福を共にしてゆくことが出来るのです。

ところが、今の学校教育はこの生活の原理を忘れて生徒の能力を評価したり、進学を阻んだりしています。わが国の憲法は「すべての国民はその能力に応じてひとしく教育を受ける権利を有する」と規定しています。私たちは子ども達のこの権利を尊重して、私たちの生活に「思いやり」と「助けあい」による正しい秩序と美しい協和の社会を実現したいと思います。

このたび結成された北海道の「精神薄弱児育成会」は、北海道にこのような社会を実現しようとする組織と運動でなければならないと思います。

城戸初代会長の文章は、さすが北大の教育学部教授と言いたくなる含蓄のある文章です。手をつなぐ育成会の存在価値を、「思いやり」と「助けあい」による正しい秩序と美しい協和の社会を実現しようとする組織と運動でなければならないと主張しているのです。

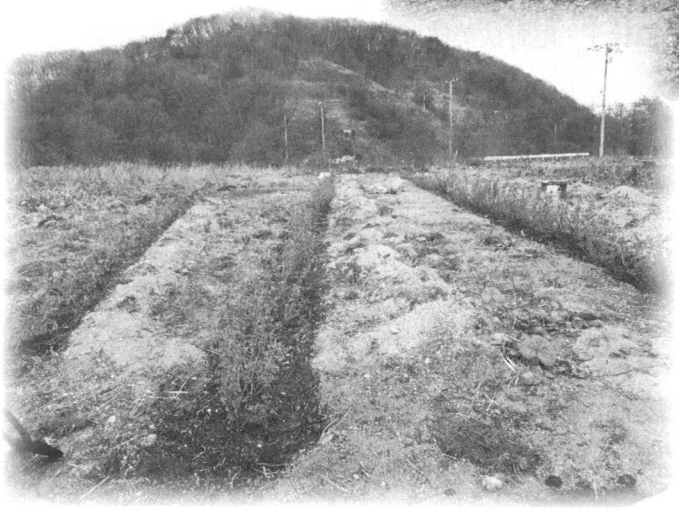
そのどこにも、狭い意味での障がい者支援や母親だけの運動に矮小化した言葉は一言も入っていないのです。北海道手をつなぐ育成会の出発は、大きな『志』だったのです。

生きている大地一大農園ができました

昨年から、フロンティアの前の空き地を北昭興業(株)さんから借りて農地づくりをしているのですが、昨年は5分の一くらいの場所にカレンリュラ植えました。大根も畝一本くらい植えたのですが、成長は良好で沢山収穫出来ました。

今年は、木の根を鈴木ホームさんから借りたユンボーで掘り起こし、作付面積を広げました。周りの雑木も切りました。トラックで3台有機肥料を入れました。その結果、すっかり田園風景になりました。人間の手を入れると、やせた土地もこんなにも生きた大地になるのかと思わずほれぼれと見てしまいます。

女澤さんは、何日もボランティアで通って自分で育てたブラックカシスを植えてくれています。それもすばらしい一大農園です。よく農業は土づくりだと言われます。昔の開拓をほんの少しですが味わう事が出来ています。



サラリーマンをやっていて普段土いじりなどしたことのない人でも、退職したら庭や畑の土をいじり始めます。きっと日本人の DNA の中には農耕民族としての血が流れているのだと思います。それにしても、何度もすばらしい景色を見に外に出てしまいます。皆さんも見に来て下さい。

ふろんてぃあ♡メィル
Frontier
就労支援施設
フロンティア♡MAIL
2015年5月号
〒059－0922
白老町萩野310－110
TEL・FAX0144-83-3537

施設外就労先で働く

フロンティアは障害を持つ人たちが働く就労支援事業所として平成17年に開設しましたが、平成26年度から「カフェリムセ」・「ナチュラルサイエンス」等と契約し施設外就労を開始しました。全体の工賃引き上げに一役かっているカフェリムセを紹介します。

カフェリムセRIMSE(リムセとはアイヌ語で「踊り」。)
カフェリムセは、アイヌ語地名のポロトコタン(大きい湖の集落）のほぼ中央にある。

ポロトコタンはアイヌ民族の伝統的な集落を再現した野外博物館で博物館やチセなどがあり、一般財団法人アイヌ民族博物館が運営しているが、2020年度に国立の博物館を中核施設とする「民族共生の象徴となる空間」の開設が決定されている。

店の入り口には印象的なアイヌ文様の看板「Museum Cafe　RIMSE」がある。国内唯一の「アイヌ民族博物館」ということで各国から頻繁に来客があり国際的である。

施設はビニールハウスだが、天井や壁に葦簾が張られて一見チセの雰囲気。田湯店長のデザインのアイヌ語メニューなどの説明書きが読みやすい。人気のアイヌの伝統料理オハウ（鮭と野菜のスープ）といなきびご飯のセット、新メニューのニセウうどん（どんぐり粉入りのうどん）をはじめ軽食などを販売。職員5人・利用者4人が勤務している。

リムセのスタッフです！

(5月9日花冷えの朝、開店間もない午前にリムセのお店を覗いてみた。)
(記者）おはようございます。昨年もお邪魔しましたが今年もふろんてぃあメィルの取材に伺いました。
「一同」：はい！（朝の準備の時間帯であり少し余裕・・・。）
写真左から「店長の田湯美奈子・利用者の大廻眞裕・野中敬子・職員の佐藤美穂子・利用者の秋山美幸」
(本日非番の方：、職員の丸山貞子・山口玲子・尾野扶美枝、利用者の赤川小百合)

店長は一番若い！田湯美那子さん。

(記者)：田湯店長さん、昨年の4月1日に採用になり、オープンの準備も任され大変でしたね。また新作メニューを考案中とか聞きましたが？
「田湯」：そうです。鹿肉ハンバーグカレーライスと白老牛の牛筋カレーライスを。
(記者)：いつごろ販売ですか。
「田湯」：5月の中旬に販売開始を予定しています。
(記者)：エゾシカ肉のザンギも販売されたそうですね。
「田湯」：肉が柔らかくて美味しいと凄く好評です。
(記者)：店が混んで来てもいつもゆったりした感じがありますが、店長の雰囲気ですか？
「田湯」：順番にこなしていくということで・・・。
(昨年お会いした時より、更に落ち着いた感じで店の空気が心地よい。)

利用者にインタビューしてみました・・・
ソフトクリーム巻けるようになりたい！

秋山美幸さん：(昨年の途中から掛け持ちで配転になった。今年度から本格的にリムセで就労することになった。)
(記者)：秋山さん、こちらの仕事はどうですか？・・例えば以前と比べて？
「秋山」：こちらはなんでも楽しい。忙しいですよ。(とにかく楽しそう。)
(記者)：秋山さんは、今はどんな仕事を？
「秋山」：食器洗いを主に、レジ・配膳など。
(記者)：ソフトクリーム巻きは昨年皆さん苦労していましたが秋山さんはできますか？
「秋山」：うまく巻けない。難しい。見習い中です……。
店長のひとこと：「秋山さんは、食器洗いの手際はピカイチ。新しいことにも笑顔で挑戦できる積極性があります。」

(大学生の女性一団が寒い寒いと言いながら押しかけ店内が暖かいと喜びの声。)

利用者の紹介です。(店長のひとこと)

野中敬子さん：(コミュニティ喫茶ケサラの顔として活躍していたが昨年の5月末の閉店に伴い、リムセに配転。)
「リムセのムードメーカー。みんなやお客様をいつも明るい気持ちにさせてくれます。手先が器用で丁寧なので細かいところの掃除などが得意です。」

赤川小百合さん：(喫茶ケサラからリムセに配転。)
「いつも周りの様子をよく見ていて誰も気づかないことをよく見つけてくれます。皆を心配したりさりげなくサポートしてくれたりするお姉さん的な存在。」

大廻眞裕くん：(昨年からリムセに配転。)
「リムセの黒一点。一番の努力家。地道にコツコツ頑張ります。ソフトクリームを巻くのはプロ並みです。細かな気配りがお客様に大変喜ばれています。」

(記者)：昨年新作された鹿肉入りのニセウうどんを食べてみました。スタッフの給食もおいしそう。食べたかったな。烏賊と野菜の塩いため・サラダ・きゅうりと蕪の浅漬け・オクラの味噌汁・みかんのゼリー。今日はお客様の込む前に食べてまた頑張ります。

耳寄りな話：町民の入館料・駐車場料金は無料です。何か証明になるものを提示してください。新緑のポロトコタンへ足を運び、カフェリムセにどうぞお立ち寄りください。

平成27年度 所員部会役員新メンバー決定!!

4月9日(木)の所員会議で平成27年度の所員部会役員を決めました。
その他にも平成27年度の目標などもみんなで考えました。役員は下記のメンバーです。
会　長…佐藤昌義くん
副会長…高部立太くん・近藤　渉くん
書　記…橋本宏樹くん・門脇千夏さんです。みなさん宜しくお願いします。

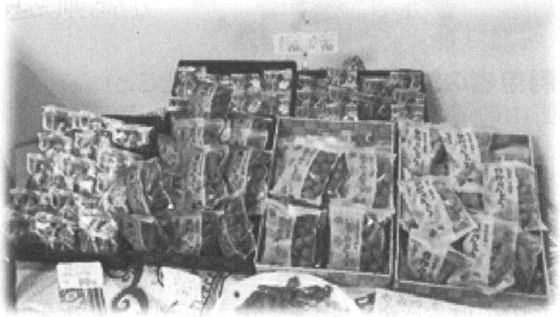
いきいきと楽しく働く場をめざして
2015年5月号

フロンティア登別通信

〒059-0463
登別市中登別町８８－２
TEL/FAX
0143-83-7878

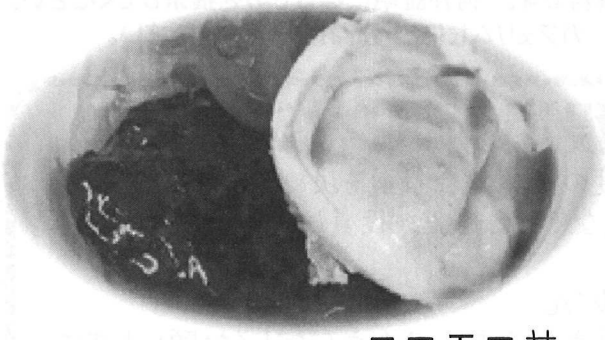
売店名「カフェウポポ」に決定!!

開所してから職員・所員で話し合ってきた売店名が決定しました！！「カフェ・ウポポ」です。ウポポとは、「歌」を意味する。「座り歌」と訳されることもあります。一種の輪唱の形式をしたもので、成句一つだけで歌われていることが多いそうです。（出典：ウィキペディア）地域の皆さんと共にウポポのハーモニーを奏でてたくさんの方が笑顔になるカフェにしていきたいと思ってます。

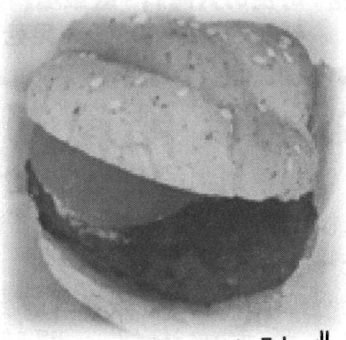


ゴールデンウィーク営業しました。

５月に入りゴールデンウィーク。暦通りに休みしようかという話し合いの中で職員みんなが「いやいや開けましょう！！」という積極的な意見に後押しされて３～６日の４日間、フロンティア登別の売店「カフェウポポ」を開店しました。所員のみんなも「わたしも！！ぼくも！！」と出勤希望が続出で、当初は職員２名に所員３名体制の予定が職員３名に所員４名体制に増員して開店することになりました。ゴールデンウィーク期間は鹿肉ハンバーグのロコモコ丼や鹿肉ハンバーガーを販売して毎日、準備した食数を完売することができました。鹿肉ハンバーグは、生産体制が確立されるまでにはもう少し時間がかかりそうですが第１弾でロコモコ丼やハンバーガーを販売できたのは大きな前進でした。ご来店いただいた皆さんどうもありがとうございました。



ロコモコ丼



ハンバーガー

閻魔焼きそばやってます。

By 喫茶ハーモニー

フロンティア登別の所員が働く登別市民会館内にある喫茶ハーモニー（登別市手をつなぐ育成会）では、テレビや新聞等でも宣伝されていた「登別閻魔焼きそば」を販売しています。鹿肉とフロンティアの卵を使ったお店のママの力作です。閻魔焼きそばだけにピリッと辛くもまろやかでヘルシーでやわらかい鹿肉と焼きそばの相性がピッタリの逸品です。一食７５０円です。是非、喫茶ハーモニーへいらっしゃいませ。

フロンティア登別所員会議役員選出

登別市議会議員選挙の投票日前日…。フロンティア登別では、自治会組織の議会、第１回フロンティア登別所員会議が開かれました。議題は、役員の選出。さまざまな議論の結果、役員候補の立候補で選挙によって選出されることとなり第１回フロンティア登別所員会議役員選挙が厳正に行われフロンティア登別の平成２７年度の所員会議役員が決定しました。

会　長　菅井　麻貴さん

副会長　秋保　直子さん

書　記　小倉　一輝さん

今年度１年間どうぞよろしくお願いします！！

ＨＳＫ　ほほえみ

昭和４８年１月１３日　第三種郵便物認可
発行日　2015 年 5 月 10 日発行 (毎月 10 日発行)
ＨＳＫ通巻番号５１８号
編集人 / 北海道白老郡白老町字萩野 310－110
白老町手をつなぐ育成会　佐藤 春光
TEL　０１４４－８３－３５３７
会　報 / ２２４号
発行人 / 北海道障害者団体定期刊行物協会（ＨＳＫ）
定　価 / 1 部１００円（会費に含む）